

『グレート・ギャツビー』の鉄道旅行

秋山 義典

1. 「動き」の鉄道

フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』を考えると、様々な場面でモノや人が動いているのに気が付く。ニック自身も4章で「人間には4種類しかない。追われる、追う、動きたがる、動きたがらない」とつぶやいている。この「動き」とは時間と空間の座標軸にも置き換えてみることもできる。第一次世界大戦は、ギャツビーとデイジーを引き離した。ヨーロッパで戦っている時間の隔たりと遠く切り離されたデイジーとの間の距離が生まれ、デイジーとの断絶に悩み苦しむ。モダニズムは動きと運動の視点から、こうしたギャツビーの苦悩に答えることができるのかもしれない。この小説のなかには、自動車が走る場面も数多く、印象的な動きを象徴している。

2. 「癒し」の鉄道

レオ・マークス『庭の中の機械』(1964)によれば、かれら中西部人は、いまこそ自分が来た道をたどって、緑の田園に戻るべきであると主張される。人工的な緑のロング・アイランドを対比させながら、「それが僕の中西部だった」とニックはつぶやく。マークスは指摘していないが、ニックを感じる逃げだしたくなるような気持ちに救いの手を差し伸べてくれるのが中西部につながる鉄道ではなかったかと思われる。9章でなつかしい中西部に向かう鉄道が描写される。鉄道は東海岸から遠くミネソタの土地につながる。その線路が故郷につながり、ニックが感じた孤立と断絶を克服するきっかけを暗示する。鉄道が彼の人生に救いの手を差し伸べる。

3. 「不倫」と「ゴシップ」の鉄道

『グレート・ギャツビー』では電車は不倫のきっかけにもなると暗示している。偶然に空席だった車内の椅子に座ったとき、はじめてマートルはトムに出会った。その車内に座ったことから、見知らぬ男女が愛しあうようになる。これは鉄道のもたらす意外な側面のひとつである。人々が循環する動きには、知らず知らずのうちに、うわさやゴシップが形成される可能性も秘めている。この物語では、カメラマンや新聞記者も登場するし、エラ・ケイという女性記者はギャツビーのゴシップを必死に探している。当然かれには、黒いスキャンダルが絶えない。ギャツビー自身もデイジーと別れたあと、彼女の消息記事をこっそり集めていた。その点でマートルは、ペンシルベニア駅での行動も慎重に見える。もちろん、トムとは距離を保って移動する。彼女はキオスクでなぜか新聞を買わないで「ゴシップ週刊誌と映画雑誌」を購入している。他人のゴシップは楽しいが、自分たちの不倫のうわさが鉄道のプラットフォームでゴシップ化されるのを避けようとしている。不倫騒動がゴシップ的に騒がれる社会に都市の住人が敏感になっているからである。

4. 「時刻表」の鉄道

ニック・キャラウェイは、毎日同じ時間に起床し、オフィスへの往復には電車を使い、証券会社の仕事が終われば自分のような郊外の中流階級の間人とともに課せられた標準的な社会活動に従事する。規則的な日々を送っているニック。いわば、かれのような人物は電車の時刻表的な生活リズムを送っているといえる。ロング・アイランドの自宅まで、たとえひどい二日酔いに襲われたとしても、朝4時の電車が出ることで、ニックは再び、いつものような日常のリズムを回復する。あたかも、時刻表に沿ったかのようなスケジュールにもどる。ギャツビーもニックも規則正しい生活を送っていたが、その生活習慣は、時間厳守という鉄道運行に通じるものがあり、鉄道の時刻表的感覚にも共通する。

ヴォルフガング・シベルプシュ『鉄道旅行の歴史』(1977)によれば、19世紀後半は、空間と時間の征服と支配に集中したが、その最も一般的な表現は、この時代の科学的社会論の中心であった「循環」という概念だったと指摘している。その起源は明らかに生物生理学的なものであったが、近代的な交通のプロセスを反映したものであることも同様に重要であるといわれる。「循環する」動きとは、『グレート・ギャツビー』のなかで、鉄道という近代的な交通機関に重ね合わされている。この動きは無関係ではない。循環と前進を特徴とする鉄道の動きによって、この小説も20世紀初めの「循環」する力につながっているのではないだろうか。

5. 「鉄道王」になりたかったギャツビー

この小説の最後で、ギャツビーの父親、ヘンリー・C・ギャツビーが亡くなった息子を思い出す場面で、「息子

が生きていれば、偉大な人物になっていただろう。ジェームズ・J・ヒルのような男に。かれは国の建設に貢献していただろう」と語っている。ジェームズ・J・ヒル（1838-1916）とはミネソタ州に移住したカナダ人であるが19世紀後半アメリカの鉄道を築き上げた鉄道王として知られる。この「鉄道王」をギャツビーの人物像に重ねて肯定的に取り上げるこの場面は、『グレート・ギャツビー』ならではの特徴が潜んでいる。ギャツビーの父親は息子が James J. Hill のような（国造りの主要人物）人物になってほしかったというのを聞いて、ニックは "That's true," I said, uncomfortably（ええ、まったく）と答える。この *uncomfortably* というのは、この父親がこの後、ベッドで寝入ったとあるので、その姿を「居心地の悪さ」と示していると理解できるが、「鉄道王」と聞くと、「不快な気持ち」でそうでしょうねとニックが反応したともとれる。というのも、アメリカの「鉄道王」には、いつもポジティブなイメージが付きまとうわけではないからである。この時代の鉄道王とは大富豪であり、同時に民衆の命を奪い、冷酷残忍な奴隷使いであり、民衆の敵でもあった。その「鉄道王」の社会批判はそれ以前に、セオドア・ドライサー、フランク・ノリスやスティープン・クレインの小説に通じるところもあり、マックレイキング（社会不正暴露）とは少し異なっている。

参考文献

小池滋『欧米汽車物語』 角川書店、1982.

『余はいかにして鉄道愛好者となりしか』 ウェツジ文庫、2007.

小野清之『アメリカ鉄道物語』 研究社出版、1999.

小野俊太郎『『ギャツビー』がグレートな理由(わけ): 映画と小説の完全ガイド』 彩流社、2013

ウォルフガング・シヴェルブシュ『鉄道旅行の歴史』 法政大学出版局、1982.

ディー・ブラウン『聞け、あの淋しい汽笛の音を』 草思社、1980.

ブランチ・H・ゲルファント『アメリカの都市小説』 研究社出版、1977.

レオ・マークス『楽園と機械文明』 研究社出版、1972.

David Bradshaw, *Moving Modernisms: Motion, Technology, and Modernity*

Oxford University Press, 2016

Enda Duffy, *The Speed Handbook-Velocity, Pleasure, Modernism* Duke University Press, 2009

Lauraleigh O'Meara, "Medium of Exchange: The Blue Coupe Dialogue in The Great Gatsby." *Papers on Language and Literature* 30.1 (1994): 73-87.

Takeuchi Yasuhiro, *Gatsby's Green Light as a Traffic Signal: F. Scott Fitzgerald's Motive Force* *The F. Scott Fitzgerald Review* Vol. 14, No. 1 (2016), pp. 198-214